# 「博士論文」合否査定資料

申請者
職・氏名　　奥田　希世子

---

学位の名称　　博士（日本語日本文化）

---

論文名　　平安朝「童」の総合研究

---

審査委員　　主　査　　吉海　直人

---

副　査　　吉野　政治

---

副　査　　寺川　眞知夫

---

審査結果　　合

*2009.9.8　日本語日本文化専攻博士後期課程委員会　承認*
*2009.9.8　文学研究科博士後期課程委員会　承認*

# 博士学位論文審査結果報告書

2009年 9月 8日

| | |
|---|---|
| 学位申請者 | 奥田 希世子 |
| 審査委員 | 主査 吉海 直人 |
| | 副査 吉野 政治 |
| | 副査 寺川 眞知夫 |

本学卒業生で名古屋大学大学院人間情報学研究科博士後期課程満期退学の奥田希世子から、「平安朝「童」の総合研究」という論文を添えて、博士の学位の申請があった。これを受けて公正に審査委員が決められ、主査吉海、副査吉野・寺川の三名が審査委員として厳正に審査にあたった。

各委員は申請論文を余裕を持って査読した後、９月８日に公開の口頭試問会を開き、申請者に対して論文内容の確認、ならびに学力検査を兼ねた試問を行った。約８０分の試問であったが、各委員からは忌憚のない質問や意見が細部に亘って発せられた。それに対して申請者は、一つ一つ丁寧かつ適切に応答した。この試問を通して、申請者の学力・人物ともに申し分ないことを確認した次第である。

申請論文については、その独創的かつ斬新なテーマは言うに及ばず、調査対象の幅広さ・分析の緻密さ・論理的な展開かつ豊富な新見を有しており、高く評価できる内容であった。なるほど平安朝の「童」の存在は重要であり、その存在意義・役割は『源氏物語』などの研究に有効であることが納得された。この成果は今後さまざまな研究に応用されることであろう。

よって審査委員は全員一致で奥田希世子の申請論文に対して、博士（日本語日本文化）の学位を授与するに値するものであることを決定した。

# 博士学位論文内容要旨

2009年 9月 8日

| 学位申請者 | 奥田 希世子 |
|---|---|
| 審査委員 | 主査 吉海 直人 |
| | 副査 吉野 政治 |
| | 副査 寺川 眞知夫 |

（要旨）

奥田希世子から提出された学位申請論文「平安朝「童」の総合研究」（四百字詰原稿用紙約６５０枚）は、以下のような構成（目次）になっている。

序章　研究史

第一節　「童」研究の領域

第二節　平安朝「童」の研究

第一章　「童」概説

第一節　用語について

第二節　平安朝「童」の分類

第三節　「童」の階層と年齢

第四節　「童」の特異性から物語の方法へ

第二章　物語と「童」

第一節　「殿上童」考

第二節　「童名」考

第三章　『源氏物語』の「童」

第一節　「童」としての紫の上

第二節　「小君」考
第三節　浮舟物語と「童」
第四章　平安朝文学における「童」
第一節　『土佐日記』の「童」
第二節　『和泉式部日記』の「童」
第三節　『堤中納言物語』の「童」
第四節　勅撰集と「童」
結び

「平安朝「童」の総合研究」という題名については問題なさそうである。もっと絞り込んで「『源氏物語』の「童」の研究」でもよさそうだが、それでは複雑な「童」の解明には適さなかったようである。もともと萌芽的な研究であり、その基礎が確立されていないのであるから、やはり基礎的総合的な調査・分析が必要とされたのである。

全体は大きく四章から構成されており、それに序章と結びと参考文献が付されている。序章はこれまでの研究史の展望を兼ねており、第一節では上代における折口信夫の民俗学的な芸能論が引用されている。それに続いて中世歴史学における黒田日出男の「童」研究が紹介されている。第二節では平安朝における「童」研究として、益田勝実・服藤早苗の研究があげられている。そういった研究の蓄積を批判的に踏まえた上で、本論では総合的な「童」論の構築がめざされている。

第一章は四節から成っており、「童」の訓読や辞書的な定義をめぐって概論が展開されている。第一節では「童」の作品毎の広範な用例調査が行われており、それが一覧表にされている。これは労作である。第二節では平安朝の膨大な「童」の用例調査と分析から、それが平安朝特有の語彙であることをつきとめている。第三節では「童」の出自や年齢の幅の広がりを確認し、その特徴をとらえている。第四節では『竹取物語』のかぐや姫を起点として幅広く検討され、非一人前であるがゆえに特権的な役割

を担う「童」の正と負の両義性を明らかにしている。この両義性こそは、「童」論の核となるものである。

第二章は二節で構成され、特徴的な職掌としての「殿上童」の制度と「童名」について論じられている。第一節では歴史学的な服藤論を参照しつつも王権論には向かわず、逆に歴史と物語の間にズレがあることを明らかにしている。第二節では「童」の命名法の特徴として、母方の血筋が反映されることを確認した上で、非固有名詞的な「あこ」や「小君」としての登場が多いことを指摘している。なお注に付されている「童呼称一覧」は力作である。

第三章は三節に分けられ、核となる『源氏物語』の「童」論が展開されている。第一節では「童」としての紫の上が論じられ、さらには犬君を含めた紫の上周辺の「童」が、実は紫の上自身の象徴であることを力説している。第二節では、空蝉の弟小君を取り上げ、「童」であることの両義性を巧妙に活かして、仲介役として機能していることを明らかにしている。第三節では浮舟周辺のもう一人の小君を含む「童」が、浮舟の人生に深く関与しており、その「童」が物語展開の契機となっていることを論証している。『源氏物語』については、もっと論じるべきことが残されているのではないだろうか。

第四章は『源氏物語』以外の作品が対象となっており、四節に分けて論じられている。第一節では『土佐日記』における和歌詠者としての「童」の特異性を、望郷の念の表出者として論じている。第二節では『和泉式部日記』の「樋洗童」という不可思議な人物に注目し、宮側の小舎人童との関係を踏まえた上で仲介者としての役割を論じている。第三節では『堤中納言物語』中の『貝合』や『ほどほどの懸想』を中心に、「童」の重要な役割を立証している。第四節では勅撰集における「童」に注目し、僧侶との奇妙な関係（男色の世界）が『詞花集』『千載集』で隆盛していることを分析し、それが中世に於ける稚児の懸け橋となっていることを論じている。本章では特徴的な

作品が撰ばれているようだが、最も用例の多い『うつほ物語』の論も必要ではないだろうか。

最後の結びとして、「童」の総合研究によって明らかになった「童」の特権的役割・両義性を再確認し、それゆえ平安朝物語の展開において必要不可欠な存在であることを主張している。本研究によって、従来の「童」の定義の誤謬が是正され、また歴史と文学のズレも明らかにされたことで、ようやく平安朝物語における「童」の存在の基礎が確立したといえる。

「童」は非一人前の取るに足らない存在ではあるが、しかし「童」にしかできない特権的な役割を付与されており、そういった両義性こそが平安朝「童」の最大の特徴であったことが解明された。この成果は今後の平安朝の物語の読みをより深めることになるであろう。是非研究書として出版されることを望む。

以上の結果、奥田希世子の論文は博士（日本語日本文化）の学位を授与する資格が十分にあると判断した。

# 博士学位論文審査結果要旨

2009年 9月 8日

| | | |
|---|---|---|
| 学位申請者 | 奥田 希世子 | |
| 審査委員 | 主査 | 吉海 直人 |
| | 副査 | 吉野 政治 |
| | 副査 | 寺川 眞知夫 |

論文題名

平安朝「童」の総合研究

奥田（蟹江）希世子は本学日本語日本文学科の卒業生（四期生）である。卒業論文において既に平安朝「童」の存在に注目した力作を展開していた。奥田氏の在学中の優秀さは、新島賞受賞者であることによって保証されている。卒業後は、地元の名古屋大学大学院人間情報学研究科へ進学し、著名な高橋亨教授の指導のもとでさらに「童」の総合研究を続けてきた（博士後期課程単位修得満期退学）。その間、本学の日本語日本文学や名古屋大学の紀要、所属する古代文学研究会の雑誌、また学会誌解釈や表現研究に論文を掲載している。さらに単行本論集や注釈書の解題なども執筆しており、学位論文を提出するために必要な条件は十分にクリアーしている。

そういった研鑽の成果が博士学位論文「平安朝「童」の総合研究」（四百字詰原稿用紙６５０枚相当）として結実したのである。奥田氏は平安朝文学における膨大な「童」の存在に着目し、その形態や役割を歴史的に展望し、その成果を下敷きにして歴史とは異なる物語における「童」の役割を論じている。その前提として、従来の定義があまりにも一面的であり、複雑多岐な「童」の実体を正確に把握できていないことがあげられている。そのため基本的な定義の見直しから、総合的な研究へと論が展開されている。

「童」に関しては、文化史学の方面で服藤早苗氏が『平安王朝の子どもたち』をはじめとして精力的に研究されている。それとほぼ同時期に、国文学畑においては奥田氏が「童」に注目した萌芽的な研究をされてきたのである。その意味でも「童」論には奥田氏のオリジナリティが認められる。

「童」の定義で誤解されているのは、その年齢設定である。一般には年少の者を「童」と考えているようだが、実のところ年齢的には成人を過ぎても、職掌的に「童」のままということも少なくない。従来はそれを成人儀礼の有無として片付けてきた。しかしながら『竹取物語』のかぐや姫は、裳着を済ませた後でも「童」と称されており、これまでの定義では説明できないのである。こうなると平安朝文学には、歴史や制度では片付かない文学特有の「童」の存在を認めざるをえないようである。

「童」は非一人前の存在であり、だからこそ外部の視線にさらされるような役割を担わされているのだが、そのことが逆に「童」の重要性を浮き彫りにしている。『伊勢物語』二十三段「筒井筒」の幼恋、それを踏まえた『源氏物語』の夕霧と雲居の雁の幼恋などは、むしろ主役に近いものであろう。とはいえ「童」論の焦点は主人側ではなく従者側、特に姫君に仕える女童に絞られている。そこが「童」論の核ともいうべきところだからである。

『落窪物語』のあこきなどは、女童でありながら男を通わせている好例である。これによっても「童」が年少者でないことは明らかであろう。あこきは後に女房に昇格して衛門と名乗っているが、そこから「童」でなければ勤まらない役割の存在が浮上する。その典型が『和泉式部日記』における小舎人童と桶洗童の存在である。

女童は一人前でなく、しかも女房の序列からしても下位なので、姫君から最も遠いところ、姫君を中心とする同心円の一番外側に位置している。そのため庭に下りたりするのだし、外部と接触あるいは外部の視線にさらされることになるのである。しかし外部と接触するということは、必然的に外部と内部をつなぐパイプ役を担うことになり（蔵人的な役割）、内部にいる姫君を視覚的に想像させる唯一の手掛ともなる。

要するに見えざる姫君の経済力や趣味が、視覚にさらされる女童（着ている衣装を含めた女童の立ち居振る舞い）に反映されていると見なされるわけである。その意味で女童は、姫君の「分身」「象徴」として機能していることになる。平安朝の「童」には特有の両義性が担わされていたのである。

以上のように本論文は方法論としても斬新で、内容的にもしっかりした構成になっている。しかも「童」に関する多くの新見が提示されており、高く評価される論文である。また今後の研究の広がりも期待できる。よって学位を授与するに値する論文であると認める。

# 試問結果の要旨

2009年 9月 8日

| | | |
|---|---|---|
| 学位申請者 | 奥田 希世子 | |
| 審査委員 | 主査 | 吉海 直人 |
| | 副査 | 吉野 政治 |
| | 副査 | 寺川 眞知夫 |

（要旨）

提出された学位申請論文をあらかじめ下読みした上で、三名の審査委員が揃って、公開の口頭試問を行った。

まず主査である吉海から、学位申請に至る全体的な経過を説明し、研究発表・活字論文の本数など、申請に必要な条件をすべてクリアーしていることを確認した。

その上で、提出されたＡ４用紙２１８枚（四百字詰原稿用紙６５０枚相当）の申請論文「平安朝「童」の総合研究」について、厳正なる試問を行った。

最初に吉海主査は、論題になっている「童」ついて、論文ではどのように定義しているのか、また「童」を研究テーマに撰んだ理由ついて質問した。それに対して申請者から明確な使用意図が説明され、平安朝の「童」が物語の研究に極めて有効であることを確認した。

次に四部構成になっている各章について、各委員の専門の立場から質問が行われた。吉野副査からは語法に関する資料操作についての意見が寄せられた。寺川副査からはタイトルや論の構成、さらには歴史学と文学の違いについての質問があった。共に奥田論をより良いものにするものであった。

口頭試問は質疑応答など約８０分に亘って行われたが、各委員の質問に対する申請者の受け答えはしっかりしており、自ずから学力や人物についても問題ないことを確認した。むしろ論文にはオリジナリティーがあり、「童」の総合研究として高く評価できるものであった。その成果は今後さまざまに応用できる可能性がある。よって三名の審査委員の見解は、学位授与に十分値する論文であるということで一致した。